

持続血糖モニタ（CGM）を外来導入して得られた情報の報告

当院における使用状況

○新井 幸枝(医療法人三思会 東邦病院)

【はじめに】CGMとは continuous glucose monitoring（持続血糖測定器の略で）、専用の穿刺具により皮下組織にセンサーを挿入して間質液中のグルコース濃度を連続測定する。挿入されたセンサーには酵素（GOD:glucose oxidase）が含まれており、この酵素を間質液中のグルコースと反応させて、電気信号に変換することで連続測定を行っている。防水機能を有した「iPro2」が使用可能となり患者様の日常生活に即したデータが得ることが可能となった。SMBGの値による補正が必要なため、装着時には正確な測定時間と測定値の記録を記録する必要がある。その他血糖変動に影響を及ぼす薬剤の使用時間・食事・運動など詳細な記録により、多くの情報を得ることが可能となる。

【背景】日常生活における個々の患者の血糖変動を把握することから、より良好な血糖コントロールの実現に有用な情報として運用を開始した。

【症例 1】I 型 72 歳女性 BMI 21.1 HbA1c6.8%超即効型インスリンと時効型インスリン 2 回打ちでコントロールしていたが、SMBG を積極的に実施し前向きに取り組むが頻

回の低血糖症状を自覚していた。持続型インスリンの作用時間がより長い製品に切替えことにより、特に夜間から早朝にかけての低血糖が改善された。

【症例 2】1 型 53 歳男性 BMI 23.2 HbA1c6.3%超即効型インスリン製剤と時効型インスリン製剤 1 回/日打ちでコントロール。CGM をきっかけに非日常的な食生活の抑制が見られ治療薬の効果確認が困難となった。

【まとめ】持続血糖モニタ（CGM）の記録により膨大な情報を得ることができる。しかし、当事者である患者自身が記録の目的を十分に理解していなければ、折角の記録も無駄になってしまう。検査の期間は食事記録や SMBG の記録等の非日常を依頼することから患者様自身の行動変容が伺われる場合もある。継続可能な改善であれば有効な情報となりえるが、極端な食事制限等が低血糖を招く可能性があることも、理解していただく必要がある。患者様に関わる各職種が目的をその都度確認し協力を得られることが重要と思われる。